第12回パリ国際SF・ファンタスティック映画祭
審査員特別賞◆観客賞受賞

83年度・米ファンゴリア誌選出
恐怖映画第1位受賞

■スタッフ
製作/ロバート・G・タペート
監督/サム・ライミ
脚本/サム・ライミ
特殊メイク/トム・サリバン
撮影/ティム・フィロ

■キャスト
アッシュ/ブルース・キャンベル
ジェリル/エレン・サンドワイズ
リンダ/ベッツィー・ベイカー
スコット/ハル・デルリック
シェリー/サラ・ヨーク
Ash/Bruce Campbell
Cheryl/Ellen Sandweiss
Linda/Betsy Baker
Scott/Hal Delrich
Shelly/Sarah York

カラー作品/アメリカ映画/日本ヘラルド映画 Herald

EVIL DEAD

CAN THEY BE STOPPED?

腕がちぎれる！首が飛ぶ！血管逆噴射！ホラーの帝王スティーブン・キングも絶賛した空前のスーパー・ホラー！気をつけろ！死霊が目をさます！

全米を異常震撼させた残忍ホラーNo.1！これが問題のスプラッタ・ムービー！

■EXPOSITION

今、ホラー映画ファンの間で問題となっている〈スプラッタ・ムービー〉を知っているか。マーカティ（恐怖映画研究家）によって名付けられた、一連の血まみれ映画のことをそう呼ぶのだ。

そしてこの「死霊のはらわた」こそ、スプラッタ・ムービーのまさに代表作なのである。かのホラー小説作家の巨匠スティーブン・キングも「これは今まで作られたうち最も残忍なホラー・フィルムである」と、大絶賛を惜しまない。

またアメリカのファン・マガジン〝ファンゴリア〟では、「クリスティーン」「サイコ2」といったメジャー・ホラー映画を押さえて、堂々1983年のベスト1を獲得。すでに我国でも輸入ビデオが上陸するやいなや、〝血まみれ同好会〟諸氏の熱狂的支持をうけ話題を独占している、まさに世紀末の衝撃作だ。

いや、問題になっているのは映画ファンの間だけではない。現在イギリスで、こうしたスプラッタ・ムービーのビデオ化商品に関しても、検閲が必要なのではないかという問題が起こっている。性表現よりも暴力や残酷表現に規制の厳しい欧米だが、そのきっかけとなった札付き映画が、この「死霊のはらわた」である。汚らわしい映画ビデオの一本として、「地獄の謝肉祭」や「悪魔の沼」とならんで、スコットランド・ヤードの公式リストにピック・アップされているのだ。

なるほど物語のシチュエーション、恐怖の描写、特殊メイクなどにおいて、「悪魔のいけにえ」「ゾンビ」「エクソシスト」「キャリー」「13日の金曜日」「遊星からの物体X」などの全要素をインプットしたような、出血多量の、首は飛ぶ、手首は叩き斬られる、足は刺される、目はえぐられる、どてっ腹からは血の逆噴射!!だからキッチュで面白い。

5人の休暇中の学生が知らず知らずのうちに、森の廃屋の地下に眠っていた〝イヴィル・デッド〟(死霊）を、古代の眠りから甦らせてしまう。次々に死霊にのり移られ、見るもおぞましき醜悪なゾンビとなって生存者に襲いかかる。死霊にとりつかれないためには、手足、胴体などをバラバラに切断する以外にないのだ。5人の仲間による残忍な血祭りの儀式が始まった。果たして誰が生き残れるのか!?
そして死霊は……!!

こま切れにされヒクヒク蠢めく肉片や、叩き潰される指、そしてサクサクとヌメヌメと朽ち果ててゆくゾンビの死体、血が染み出すコンセントなど、特殊メイクとイフェクトが、なんといっても見どころだ。特殊メイクはトム・サリバン、特殊効果撮影はバート・ペアス。このコンビは前記の〝ファンゴリア〟誌、1983年顕著な特殊メイク・アーティストの第3位にランクされている。

前半のパターンを踏襲した恐怖シーン、そして後半の血まみれショック・シーンと、メリハリある演出をみせるのは、日本初登場のサム・ライミ監督。同じく〝ファンゴリア〟誌の1983年ベスト・ディレクターとして、デビッド・クローネンバーグ、ジョン・カーペンターに次いで第3位にランクされた。脚本もライミ自身が担当。製作はロバート・G・タペート。音楽はジョー・ロドッカ。

製作総指揮にも名を連ねる主演のブルース・キャンベル他、エレン・サントワイズ、ベッツィー・ベイカーら、出演者も無名で一層恐怖度が増した。

これぞ映画の良心をあざ笑う、呪われたスプラッタ・ムービーなのである。

死霊(しりょう)のはらわた

■STORY　そこはテネシー州あたりの深い森の中だった。霧が立ち込める、薄気味の悪いムード。邪悪なナニモノかが、猛スピードで這いずり回っているのか!?

休暇をこの森の廃屋で楽しもうと、ルンルン気分の学生5人が4WDを駆っている。が突然、アッシュ（ブルース・キャンベル）が握っているハンドルの自由がきかなくなり、対向車のトラックと危うく激突しそうになった――。

今にも壊れそうな橋を渡り、一行は廃屋に到着した。ドアの上に隠してあった鍵をみつけ出し中に入ろうとすると、風に揺れていたはずの遊動円木がピタリと静止した。いったい何が――。

アッシュとリンダ（ベッツィー・ベイカー）、スコット（ハル・デルリック）とシェリー（サラ・ヨーク）はそれぞれカップルだが、シェルリ（エレン・サントワイズ）は相手がいない。彼女が古い柱時計をスケッチしていると、午後10時30分のところで振り子が突然静止。驚くシェリルの体は金縛りにあったかのように硬直し、手だけが勝手に気味悪い顔のようなものを書き出す――。

次の夜、アルコールが入り盛り上がった只中に、床蓋がガタガタ鳴り始め地下室へ通じる蓋がはね開いた。動物でもいるのか!?　スコットはフラッシュライトを手に降りてゆく。なかなか戻らぬスコットを心配して、アッシュも降りた。二人はそこで、ライフルやドクロの柄の短剣、テープレコーダーと一緒に死霊について記録された書を発見する。どうやら死霊を封じ込める研究をしていた学者の家だったようだ。その記録の中に、シェリルが書いてしまったあの顔の絵が――。

テープの中身は死霊の話だ。シェリルは気味悪がり止めようとするが、スコットが面白がって再生を続ける。やがて何やら忌わしい呪文が聞こえたかと思うと、庭に赤い閃光が起こった。彼らの無邪気な行為が知らず知らずの内に、地下に眠っていた〝イヴィル・デッド〟(死霊)を古代の邪悪な眠りから呼びさましてしまったのだ。彼らはまだ何も気づいてはいない――。

アッシュはリンダにペンダントをプレゼントする。スコットとシェリーはニャンニャンしようと。中を覗かれている気配を感じたシェリルは庭へ出た。すると不意に大木が倒れ、細い枝がヒュルヒュルと這い延び彼女をレイプするではないか。手足に巻きつき首にからまり、服を引き裂くのだ。両足が開かれた股間に、とどめの一撃が突き刺さった。

必死で廃屋に逃げ戻ったシェリルは、半狂乱で家に帰りたいと泣き叫ぶ。しかたなくアッシュが車を走らせたが、途中の橋が壊れており先に進めない。あたりは暗い。廃屋に戻るよりすべはなかった。月を黒い雲が不吉によぎる――。

ルンルンのはずだったパケーション。遂にシェリルは死霊にのり移られた。シェリルが、いやシェリルの肉体をした腐肉の形相のゾンビが仲間を襲う。鉛筆がくるぶしに突き立てられる。なんとか取り押さえ地下室への床下に監禁したと思った矢先、今度はふり向いたシェリーがゾンビと化していた。爪でスコットの皮膚を裂き、自分の手首をガリガリと喰いちぎったのだ。ちぎり落とされた手首はドクロ柄の短剣を握り、ゾンビの背中をえぐる。血を吹きのたうつゾンビは口から白濁の汚液をまき散らし、息絶えたかに見えたが、再び立ち上がり襲撃開始。スコットは斧でゾンビに一撃をくらわし、全身をバラバラに叩き斬った。血だらけの床の上で、こまぎれの肉片がヒクヒクと震える。リンダは泣き叫び、床下に監禁したゾンビが恐しいうなりをあげる。男二人は肉片を庭に埋めた。シェリーは死んだ。が、死霊にのり移られないためには、肉体を切断する以外ないのだ。果たして誰が生き残れるのか――。

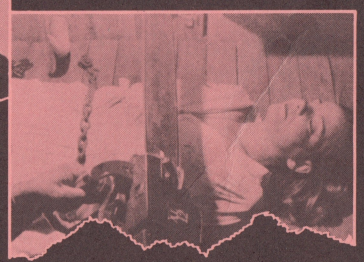
リンダの足に血のひび割れが走る。とうとう彼女にも死霊がのり移った。スコッティも外で襲われ傷ついていた。アッシュがライフルを構えると醜く変身したゾンビは元のリンダの顔に戻った。監禁中のゾンビも元のシェリルに戻り、ここから出してくれと哀願する。引き金を引くに引けないアッシュ。しかしそれもつかの間、再びゾンビがのり移ったリンダが暴れ始めた。乱闘の末ドクロ柄の短剣を刺すと、ゾンビはもんどりうって口から血を噴き出す。ゾンビの手足を拘束し、電動のこぎりのスイッチを入れるアッシュだが、ゾンビの首にかかったリンダに贈ったペンダントを目にするとどうしても切断出来ない。ゾンビは美しいリンダの顔と肉体に戻っていたので、ペンダントをはずし、庭に埋めた。その時、やにわに土の中から手が突き出て、アッシュの足首をつかんでかきむしった。血の海から、今埋めたゾンビが踊り出る。必死でふり回したスコップが、スパッとゾンビの首をとばした。首なしゾンビがアッシュを襲う。

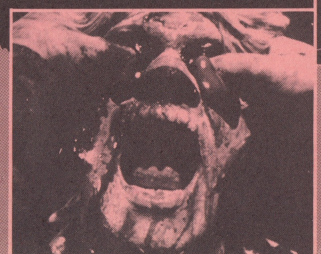
なんとか仕留めて廃屋へ戻ると、監禁していたゾンビが鍵を壊し、アッシュを急襲する。そして、地下室の古い蓄音機と映写機がひとりでに回り始めた。配管からは血がしたたり、コンセントから、壁から、電球から、建物じゅうから血が染み出してきた。鏡の面さえ血の水面だ。廃屋は血の池地獄と化したのである。

ドアを突き破り、なおもゾンビが襲い来る。傷を負っていたスコットもゾンビとなってアッシュに襲いかかる。親指での両眼つぶし。腹わたへの一撃は、赤ワイン樽の栓を抜いたように血が流れ出た。唯一人の生存者となって絶体絶命のアッシュは、地下で発見した死霊についての書を暖炉の火の中に投げ入れる。動きの止まったゾンビの体が、みるみる内におぞましく朽ち果てた。腐った肉塊を喰い破り、ドロドロヌルヌルしたものが部屋中にとび散った。死霊は滅びた。のであろうか――。

古い柱時計が再び時を刻みはじめ、血ぬられた惨劇の夜が明けた。一人生き残ったアッシュだったが、その背後に迫るナニモノかが――。

We Love HORROR





'85年新春、日本全土を驚愕させる〈衝撃〉のロードショー！